

保津川の筏流しを通しての地域の知恵とそのつながり

亀岡 FS 研究員 河原林 洋

1. はじめに

約 1200 年の歴史を持つといわれる保津川（桂川）の筏流し。その歴史を通して、筏流しは地域の産物を運ぶ流通手段であり、山とまちを結ぶ経済的大動脈でもあった。流域の産物が川下へと運ばれ、まちの生活を支え、まちの文化などが川上へと運ばれ、流域の生活を支えた。筏流しの拠点は栄え、数多くの地域住民が筏流しの恩恵を受けてきた。保津川を中心に、可視・不可視的に流域住民が密接にリンクし、互いに支え合っていたのであ



写真 1 保津川を下る筏

る。しかし、筏流しは、昭和 20 年代を境に、急激に減り、現在ではその姿を見ることはなく、流域住民によってその技術・歴史・文化を顧みられることは少なくなった。

経済・文化の大動脈であった保津川は、農業や保津川下りをはじめとする観光業のみが恩恵を受ける河川となり、多くの流域住民との関わりは消えつつある。川のにぎわいは影を潜め、川はただの洪水、生活水、ごみなどを垂れ流す一種の排水路と化した。「生きた」川ではなく、「死んだ」川へと変貌しつつ、山・川・ひとのつながりはかつてないほどに乏しくなった。

保津川の流れによってつながっていた流域住民をもう一度その姿に戻し、あらたなる人の交流・ものの交流へと発展させるべくいろいろな活動が保津川流域で展開されている。その一つが、私の「保津川の筏流しの研究」である。

今こそ、流域住民が再び山や河川とつながりあうことで、流域の発展はさらなる展開を見せるのではないだろうか。流域の諸団体や住民の方々とともに、これら諸問題を討議し、問題解決の糸口を探り、地域の発展の一役を担えればと考えている。

2. 筏流しを地域の知恵・財産に

筏流しを単なる衰退した一つの流通手段と見るのではなく、流域の産業形成、都市形成を支え、発展させてきた産業とみなし、その中で培われた流域の歴史・文化を流域住民の財産とする活動を行ってきた。この活動は、一人の研究者のみで行うことは難しく、多くの流域住民の参加が不可欠である。そこで、京筏組と呼ばれる団体を流域の諸団体、住民とともに結成し、プラットフォームとして、各々が活動の輪を広げている。

ここでは、平成 20～21 年度の筏流しの研究活動を紹介する。

京筏組（保津川筏復活プロジェクト連絡協議会）

京筏組は、戦後途絶えた保津川の筏流しの歴史と文化を再構築し、地域の歴史・文化の発展、地域活性化を目的とした団体。前身は平成 20 年に発足した「保津川筏復活プロジェクト連絡協議会」。平成 21 年度、保津川に限らず、桂川全体を視野に入れた活動を目指し、現団体名へ変更。主な参加団体は、京都府南丹広域振興局、亀岡市文化資料館、南丹森のエコミュージアム、NPO プロジェクト保津川、保津川の世界遺産登録をめざす会、森林環境ネットワーク、株式会社アオキカヌーワークス、天若湖アートプロジェクト 2009 実行委員会、桂川流域ネットワーク、カップ研究会、京都学園大学歴史民俗研究会、京都大学生存基盤研究ユニット・東南アジア研究所（順不同）。

元筏士への聞き取り調査

南丹地域に健在の元筏士は 3 名を数えるだけとなり、その年齢は 80 歳を超える。まさに今、その技術は途絶えようとしている。「保津川筏復活プロジェクト連絡協議会」において、亀岡市保津町在住の元筏士 2 名に聞き取り調査を行い、筏の技術、筏士の生活などを調査した。先人の知識と技術は多様性に溢れ、現代に生きる私たちへの「知恵」として活用されるべきではないだろうか。



写真 2 元筏士の聞き取り調査

保津川の元筏士

平成 20 年 5 月より、亀岡市保津町在住の元筏士である上田潔氏と酒井昭雄氏に筏組・筏流しの技術について聞き取り調査をしてきた。元筏士はこの地域では 2 人だけとなった。

上田氏は、大正 9 年 4 月 29 日、亀岡市保津町生まれ。昭和 23 年頃筏士となる。酒井氏は、昭和 2 年 5 月 3 日、亀岡市保津町生まれ。16 歳より祖父の勧めもあり、筏士となる。2 人とも昭和 32～33 年頃まで、保津峡から筏を流していた。



写真 3 上田氏(右)と酒井氏(左)

筏流しは、主に農閑期の冬期、保津峡と呼ばれる峡谷内の足場の悪い中で行う寒さと危険を伴う過酷な仕事であった。ここで当時の筏士の日を紹介する。

朝、7時半ごろ山陰本線の亀岡駅を汽車で出発し、保津峡駅で下車し、保津川の現場へと向かう。主に筏士は4～5名で、木馬¹⁾や車(牛に曳かせる)で川辺に運ばれた木材を川に落とす者、木材を太さや長さによって並べ替える者、1連ずつ筏に組む者、組まれた連を1枚の筏につなげる者、とそれぞれ役割分担がなされていた。平均12～13連をつないで1枚の筏とした。筏を組み終わるのは、14時頃で、それから筏で嵯峨へ向かうのである。上田氏はこの時「やれやれ」という気持ちになったそうだ。それだけ急斜面、急流での筏組は危険な重労働であった。嵯峨まで下ると、筏は筏仲仕²⁾に引き渡し、筏士は嵯峨駅へと帰途に向った。

保津川の筏

元筏士への聞き取りのなかで、実際に筏を組み下す方法を学んでいる。一般的に筏というと、木材を単に横にならべたものと思いがちだが、狭小で歪曲な急流を下る筏を組み下すことは、長年培われてきた技術と経験が必要である。

ここでは紙面上の都合もあり、昭和20年代の保津川の筏組と筏流しの概略のみとする。

保津川における筏のサイズは、保津峡の川幅の狭さや流れの激しさ等により、幅約2.7m、長さ約55m³⁾までとされた。筏を細分化すると約12～13連の筏で構成されている。直径9cm以上、長さ約4mの木材を縦に並べ、各木材の両端にコウガイ(カシの木等)と藤蔓を横に並べて、U字型のカンという金具を縦に打ち込み、両者を押さえ、両端を藤蔓でくくる。これで幅約2.7m、長さ4mの筏が出来上がる。これを「連」と呼ぶ。これらを縦に12～13連、藤蔓のみでつないでいき、全長約55mの一枚の筏が完成する。1連目からハナ、ワキ、ソウと呼び、特に重要視した。なぜならば、これらの部分に筏を操舵するときに必要な舵が取り付けられるからだ。舵を取る筏士は、ワキの筏に乗り込みハナの部分に取り付けられた「カジボウ(ねじ木)」と呼ばれる舵を上下左右に動かすことで筏の舵を取っていた。

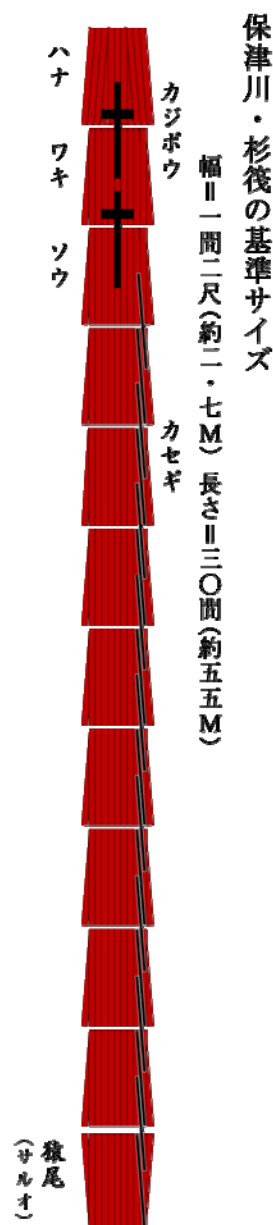


図1 保津川の筏の構図

1) 木馬(きんま)…木材を運ぶそりみたいなもの。
 2) 筏仲仕…筏を解体し、嵯峨の貯木場まで運ぶ。
 3) スギ筏は幅1間2尺×長さ30間が江戸時代(延宝期)以来の協定規格であった。(藤田1973)



写真4 連を組む



写真5 連をつなぐ

かつては、筏を2～3人で操舵し、1人目は、ハナに乗り、岩などにあたらないようにヒノキの竿で岩や川底を突き、2人目はワキで舵を取り、3人目は筏の後尾で筏が岩に当たらないよう竿を突いた。

全長約55mある筏を組み下すことは、熟練した技と豊富な経験に裏打ちされた伝統的な筏組・操舵技術によってなされるものである。それらは日々筏を組み下すことで培われ、伝わっていくものである。元筏士の年齢を考えると実際に筏の上で学ぶことはかなわない。いかに、机上に置いてその技術と経験則を学び、後世に伝えていくかが課題であろう。

筏組・筏流しの実践

平成20年9月、私が参画する保津川筏復活プロジェクト連絡協議会主催の筏流しのイベントを行った。それまで元筏士より聞き取ってきた筏組の技術の継承と筏流しという地域財産を流域住民に伝えることを主眼とした。亀岡市立保津小学校と京都府立南丹高等学校の生徒を対象に、筏組の体験教室、試し乗りを行い、子供たちの歓喜の声が保津川にこだました。筏を見て、触れて、感じることで保津川の歴史・文化の一端に触れ、保津川に対する認識も変わったのではないだろうか。



写真6 筏体験教室(平成20年)

元筏士の指導の中、保津川下りの船頭衆11人で幅約1.5m、全長約18mの6連の筏組を行った。木材は保津小学校に保管されていたものを利用した。各工程を元筏士に確認してもらいながらの作業となった。保津川の筏は、急流を下るため、荒波にも強い筏を作ることが必要だ。筏組に必要なものは、木材、カン、コウガイ、藤蔓の4要素である。各要素がお互いに調和して初めて強い筏となる。しかし、ここにおいて、強いという言葉は、一般の意味とは若干異なる。組まれた筏は、隙間があったり、藤蔓は緩かったりと一見頼り

なく思える。実際、筏に乗ってみても、木材は1本1本動くし、隙間に足が挟まりそうになる。また、連と連とをつなぐ藤蔓も緩く、前後の筏が流れごとに離れたり近づいたりする。しかし、これらのことが肝要なのだ、元筏士は言う。もし、隙間なくしっかり作りすぎると、荒波に反発するため、どこかに負担がかかり支障が出る。荒波の力をうまく受け流すように「ゆるみ（あそび）」がなければならない。これが強い筏なのである。反面ゆるみすぎてもうまくいかない。この加減は長年の経験知で判断されるのだ。「ゆるみ」が「つよさ」を生む。「つよさ」を「つよさ」で抑え込まない。ここに、先人の自然と接する術を垣間見たように思う。

川の流れを熟知するベテラン船頭6人で、保津川下り乗船場から亀岡市篠町山本まで約3kmの筏流しを行った。これには現役の船頭衆の存在が不可欠であった。川の流れを知らぬ素人では、到底実現不可能であったろう。一瞬の判断で流れを読み、安全な流れへと筏を導かなければならない。400年培われた船頭衆の技術で、1200年続いた筏士の技術を継承しようとしている。乗り物の形は違うが、今も川で生きている人々の存在は大きい。しかし、山本まではまだ穏流部で、そこから始まる保津峡の急流の筏流しは次の年への課題となった。まだまだ、元筏士への調査不足と筏流しの技術の認識不足が課題であった。



写真7 筏流し(平成20年)

平成21年度、何度か筏の試作品を作る機会を得ながら、元筏士への筏組・筏流しの技術の調査を行った。保津川下りの船に乗船し、船下りの約16kmの行程の映像を撮り、急流毎に、筏を流す方向、筏の操舵方法を元筏士より聞き取っていった。これらの技術は、私自ら保津川下りの船頭であるという経験も加味でき、理論上はほぼ理解できた。しかし、船と筏とは、構造上まったく異なる。船の全長は11m、筏の全長は最大で55m。船は一体型であるのに対し、筏は12連だと11の節をもつまさに蛇のようなもの。先頭部と後部では全く逆の動きをする。また、川の流れは、緩流と急流が繰り返され、55mある筏を操舵する場合、それらの兼ね合いも考慮に入れる必要がある。つまり、筏の前部が急流に入ると、筏は先へと引っ張られるが、後部はまだ緩流である。そこで連同志が引っ張り合い、筏全体の流れ方が大きく変化する。特に、流れが大きく曲がっているところではこの変化が顕著になる。操舵を誤ると、筏士言葉で「ネズミとり」といわれるように、筏が折れ曲がって大破してしまう。全長約55mの蛇のような筏を操舵する技術は、一朝一夕では習得できない。

上記の課題を考慮し、平成21年9月、2度目の筏流しは、急流部でも多少緩やかなコースを選択し、筏の長さは昨年と同じ6連、全長は約24mと決めた。1連の長さ約4mは昔

の筏流しの規格である。

今回は、保津峡内の落合から嵯峨嵐山までの行程である。落合は、川縁に林道が通り、木材の搬入も簡単にでき、緩やかな流れで筏が組みやすい場所である。筏流し前日、地元の材木会社に発注した木材と南丹市八木町筏森山で伐採した木材計 80 本を川辺に搬入した。そこから当日、川に木材を落として、筏に組む予定にした。これが当日ハプニングを生むこととなる。

今回は足場の悪い峡谷ということもあり、高齢の元筏士の指導は依頼しなかった。また、元筏士の方から、自分たちだけで筏組することを勧められた。その分、身をもってわかることが多いだろう。なにごとにも自らの経験であると。



写真 8 木材を川に落とす

木材を川に落とす作業に船頭衆 12 人とボランティアスタッフ約 10 名で取りかかった。約 30 分程度で終える予定であったこの作業が難航を極めた。木材に不慣れなこと、木

材が十分に乾燥していないこと、木材が思った以上に太かったことなどが原因であった。トラック輸送であれば通用する乾燥状態は、筏流しには不適切である。また、木材の寸法を末口 10cm、長さ 4m に設定していたが、用意したヒノキの間伐材は、太いところで直径約 30cm になることもあった（末口とは木材の細い方の呼び名である）。重量も長さも千差万別であり、木材を調達するにも、多くの知識と経験が必要である痛感した。

また、それらの木材を筏組する場合、その重量、長さによって、各連ごとに振り分ける作業も大切であることも痛感した。重量・長さのちぐはぐな連が各作業員で作られ、あとから、長さの調整が必要な筏や他よりも沈みこむ筏が見られた。

かつては、木材を落とす、木材を選別する、木材を筏に組む作業を各筏士が分担していたが、これらの作業も長年の知識と経験が必要であり、実際の作業の困難さを痛感した。先述したように、元筏士が筏組を終えると「やれやれ」と感じたことは当然であった。筏を組むことばかりに注目しすぎて、最も重要な木材の仕分け行程を見落としていた。規格の揃った製品ばかりに取り囲まれ、作業マニュアルに慣れている現在の私たちにとって、自然の生成物をいかに取り扱うか、そこには先人の知恵が必要であろうことは想像に難くない。

また、筏流しにおいても、経験のなさが露呈する場面もあった。筏の後部が岩にあたりながら岩をよけていったこともあった。今回 6 連の筏だったのでよかったが、これが、12～13 連というかつての筏の長さであれば、どうなっていたかわからない。元筏士の方が「6 連やったら、(船頭でも) なんとかなるやろ。12 連はちょっと難しいやろね」と常々言っていた。その通りであった。かつては筏士になって 1 年以上は舵を持てなかったそうだ。1 年

以上かかって初めて川の流れ、筏の動きをある程度まで把握できるのである。

このように、今回の筏組・筏流しは、実に私にいろんな教訓を与えてくれた。聞き取りだけで得た知識は、実践の中では単なる知識でしかない。実践で初めて活用してみても真にその意味が理解できるのである。また、元筏士のなにげない言葉の中に真実が含まれ、その真実は、実践を通してしかわからないものもある。



写真9 筏流し(平成21年)

元筏士の聞き取りにおいて知りえた伝統技術をただ知識としてのみに残すだけではなく、実際に筏を組み下すことで、当時の筏流しの技術の知識を知恵として理解し、地域の財産とすることを主眼に置いてきた。しかし、その道のりは遠い。いかにして知識を知恵へと昇華していくのか試行錯誤の毎日である。

3. 筏流しを通しての地域のつながり

筏流しの調査研究にとどまらず、筏流しに付随する産業も研究の対象としたい。平成21年度は、主に、筏流しを形作る各要素を一つの流れとして検証してみた。つまり、木材の伐採、筏組用備品の調達、筏組・筏流し、木材の利用である。その他にも要素はあるであろうが、今回はこの4点に絞った。

木材の調達

衰退の一途をたどるといわれる日本の林業。伐採、出荷しても先行投資に見合う収入が得られず、さらなる投資を困難にさせ、放置するしかない状況と聞く。放置林は、採光のない暗い森林となり、土壌を疲弊させ、人工造林地帯は、がけ崩れなどの危険性を内包するといわれる。地域の山にある放置林を活用し、商品価値のあまりないといわれる間伐材に価値を生み出そうと考えている。

南丹市八木町筏森山において、地主の方の了解を得て間伐する機会を得た。筏森山は、伝説上、丹波地方が湖だった時代、神様が筏で漂着した場所といわれる。筏との関わり深い伝承を持つ山において、京都府、八木町森林組合、地元団体等の協力を得て、約30本のヒノキを間伐した。伐採方法は昔ながらの「葉枯らし伐採」とい



写真10 葉枯らし伐採

う方法。伐採後、へら状の道具で木皮をめくり、木の先の枝は残す。枝葉を残すことで乾燥を促す方法である。京都府農林水産技術センター調べでは、伐倒 4 日目に 70%程度であった含水率が、25 日目には 40%程度に低下しており、山の中での乾燥としては適当とされた。これらの木材は、8 月、9 月の筏流しに活用した。

筏組用備品の調達

かつて、筏を組む時必要な U 字型の「カン」は、地元の鍛冶屋から調達した。昭和 20 年代、亀岡市内には約 17 軒の鍛冶屋が各村々にあり、地域の農業を始めとする産業を支えた。昭和 30 年代以降の農機具の機械化・量産化の中、次第に鍛冶屋は姿を消した。しかし、亀岡の旧城下町にはいまだに 1 軒の鍛冶屋が奇跡的に残っている。京町にある「片井鉄工所」で、主人は片井操氏（79 歳）である。普段は住宅などの鉄筋を主に扱うが、鍛冶場で知人の農具を修理することもある。偶然、この鍛冶屋が、約 60 年前まで保津の元筏士の下にカンを納めていた。1 回の筏流しに使うカンの数は約 250～300 個、そして、毎回、川や貯木場で紛失するカンが約 5～10%で、定期的に補充が必要であった。

平成 20 年度の筏流しに使用したカンは 60 年前のもので、貴重であり、数も少ない。そこで、あらたにカン 300 個を発注した。片井氏は、60 年ぶりにカンを作ることを喜び、私の技術が文化的にお役に立つのであればと、快く受けていただいた。そう、片井氏も昔の技術の喪失を憂いでいたのである。

地域の産業を支えてきた技術は、地域の文化を支えてきたと同義である。この鍛冶技術をいかに残していくのかも、今後の課題の一つであろう。一度失った技術は二度と元には戻らない。



写真 11 60 年ぶりのカン打ち

筏流しの広がり

南丹市日吉町で 7 月に筏組教室、8 月に筏流しを行った。南丹市八木町の森林環境ネットワーク主催の子ども対象の行事である。

筏森山と府民の森で間伐された木材を 4 連の筏に組み、日吉ダム下流を下った。子どもたちは、筏組の段階では、本当に水に浮くのだろうかと半信半疑だったが、いざ漕ぎだすとみんな元気に筏と川と戯れ、歓声が湧いた。山や川に触れることが少なくなった現代の子どもたち。後世に山や川



写真 12 日吉町での筏流し

の大切さを伝えるには、子どものころの原体験が不可欠だ。それによって、将来、山や川を見つめる目が養われると思う。

子ども、さらには、大人の心と体を引きつけるシンボルとして、筏流しは存在価値があるのでないだろうか。筏流しを橋渡しとして、地域の山や川に人々の心が集まることを願ってやまない。

筏木材の利用

筏流しに使用した木材をただ放置しておいても意味がなく、それでは、立木と同義である。何かに利用して初めてその価値は生まれる。木材の嫁入り先探しが始まった。一つは亀岡市篠町自治会の長尾山の里山事業、そして、京都市右京区嵯峨の車折神社である。長尾山の里山事業では山小屋に、車折神社では大国主命を祀る社の玉垣に使用される予定である。このように地域の産物を地域で利用する。この図式が確立すれば、無駄な輸送料やCO₂の排出量も削減され、また、山へ経済的に還元されれば、人工林の更新も促進される。CO₂の吸収率が上がり、建材として何十年も使われれば固定率も上がるであろう。役目を終えた建材は燃料となり、灰となり、畑の肥やしにもなる。

4. まとめ

放置される山、ごみだらけの川、それに無関心な人々。いつからそうなったのであろうか。私は昭和30年代が分岐点であったと思う。そう、保津川から筏の姿が消え、農業、林業形態が変わり、鍛冶屋も消えていった。昭和30年代に戻ろうとは思わない。しかし、それ以前の生活様式を再考してみたい。山と川と人々がともにつながり暮らしていた時代を。それぞれが恩恵を受けていた時代を。その時代を象徴するものが「筏」ではないだろうか。

今後も、「筏」を通して、流域の人々とともに、流域の歴史・文化を考え、流域活性化の道筋を考えていきたい。

【参考文献】

藤田叔民（1973）『近世木材流通史の研究』 新生社

写真 1…亀岡市文化資料館提供

写真 2～12…京筏組提供